

# 高知憲法速報

205 2009.7.16

発行：高知憲法会議事務局 088 - 872-3406

編集人 事務局 徳弘嘉孝

## 戦争の惨害を深く考えるー今年高知の出版物

今年高知で戦争の本質について深く考えさせられる本が何冊か出版されました。今日も平和美術展、平和七夕などピースウエイブの行事が行われていますが、8月6日、9日、15日と平和を考える時期がやってきます。これらの本の出版は意義深いものです。

「二人の特攻隊員」大西正祐著 2009.3.15 出版  
高知新聞企業文化出版局・定価 2190 円 + 税

1944年10月25日から1945年8月15日までの航空機による「特攻作戦」で、高知県の若者52人が戦死しました。爆弾とともに敵艦に体当たりするという、生還不可能でありにも非人道的な作戦です。著者は、母校中村高校出身の宮川正(19歳)、野並哲(20歳)の二人が最初の神風特攻隊で死亡した事情を調べることを手始めにして、高知県の52人の特攻隊員戦死の真実に迫っていきます。日本共産党幡多地区委員長という多忙な毎日の中から、多くの資料に当たり、多くの人と面談して、この作戦がいかに愚かで非道なものであったか明らかになります。文面から作者の怒り、二度とこのようなことを許してはならないとの思いが立ち上り、丁寧な脚注とも合わせて、多くのことを教えられました。最近平和新聞や赤旗に登場して平和への思いを語っている元自民党幹事長の野中広務さんについての叙述もあります。良く読まれ始めたようですが、この事実は私達みんなが知らなければなりません。

「戦地から土佐への手紙」2009.7.1 出版

高知ミモザの会・企画編集発行 税込定価 1800 円

昭和12年8月、盧溝橋事件勃発後に中国に出兵した兵士の陣中日記に始まり、昭和23年8月療養病床日記まで110人の兵士たちの手紙が収録されています。それは検閲を経て出された手紙が大半であり、表現は抑制されていますが、妻や子や父母へ、自分のいない家族の生活を心配し、子どもたちの成長を願い、妻や子供たちの健康を気遣う気持ちがあふれています。この兵士たちの多くが戦死しており、

戦死した年齢や家族構成を読み、残された若々しい兵士たちの写真を見ると、この人たちを失ってしまった悲しさに胸が詰まります。「出征後生まれて父の顔を知らない」など、残された家族のコメントが手紙のあとに収録されており、この無謀な戦争が家族を引き裂いてしまった無念さを痛感します。今回大事に保管されていた手紙や写真を提供された遺族の方たちの、想いや戦後の苦労も十分に伝わってきます。第2部に「高知県の郷土部隊」「木村久夫」「この戦争の概括」などを、矢野元子、公文豪、別役佳代、窪田充治、猪野睦の各氏が書いており、略年表も付いています。一読の価値があります。

高知県の満州事変以後の靖国神社合祀者数は3万8千人となっています(高知県保健福祉課の資料では1937年以降の戦死者数は32,642人)ので、今回提供された何十倍もの悲しみが存在するわけです。今後さらに掘り起こしていくことも考えられます。

「高知の戦争・証言と調査」戦争遺跡保存ネットワーク高知編集 平和資料館・草の家発行

第1号(2009年1月)から、第6号(2009年7月)までほぼ毎月1回既に6号発行されています。

第1号；1945年4月沖縄戦の様相から本土決戦に備えて高知県に陸軍第55軍(四国防衛軍)が配置されます。この配置状態の詳細な資料から、学校や多くの公共施設に駐屯していた実態や、米軍九州方面上陸作戦(オリンピック作戦)の陽動作戦としての四国上陸作戦(パステル作戦)についても分析しています。この他南国市のトーチカ記録など3編掲載。第2号、第4号；戦前戦中の高知における朝鮮人労働について、馴田正満氏の論文。現在の四国電力の電力を確保するために作られたダムや発電所などに、朝鮮人の労働力が使われたことを個々の発電所の記録などから詳細に跡付けています。

第3号；高知空襲の夜のこと、鉢伏山での陣地構築の日々、軍隊日記、父は水中の特攻隊員でした、など6人が書いています。

第6号；ぼくが見た高知大空襲 岡村正弘さんの被害体験を西森智恵子さんが漫画にしました。空襲で家を焼かれ、母親と妹を亡くした岡村さんは最近、語り部として活動しています。子どもにも伝わるようマンガになりました。第5号は未入手。

第1号のみ100円、第2号～第6号は200円。